

「かながわ人づくりコラボ 2015」の実施結果の概要

1 開催の趣旨

かながわ教育ビジョン第6章に基づき、「かながわ人づくりコラボ」を開催する。コラボ 2015 では、かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、かながわ教育ビジョンの一部改定を踏まえ、様々な主体との協働・連携による人づくりを一層推進するとともに、実効性のある教育施策に資する。

2 開催の状況

- (1) 日 時 平成27年11月7日(土)13時15分から16時30分まで
- (2) 場 所 横浜市西公会堂
- (3) テーマ かながわの教育力を生かした自分づくりと協働・連携による人づくり
～かながわ教育ビジョンの一部改定を受けて～
- (4) 参加者 371名

3 開催の内容

(1) 開会(神奈川県教育委員会 委員 倉橋 泰)

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」一部改定後の最初のコラボである、本日の開催の趣旨と内容の概要について話があった。

(2) 「かながわ教育ビジョン」の一部改定に関する提言についての報告

(かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 高木 展郎)

平成25年11月より、「かながわ教育ビジョン」の一部改定に向けて、多くの県民の方の参加を得て論議し、また検討協議を経て、かながわ人づくり推進ネットワーク幹事会がまとめた「提言」について、策定プロセスや内容の説明を行った。

提言の内容としては、提言のめざす方向性、子どもから大人まで県民一人ひとりが、生涯にわたる自分づくりに、自ら積極的に取り組んでいこうという呼び掛けやその実現への期待を込めた、柱1「いのち輝く」かながわの生涯にわたる自分づくりを始めとした5つの柱・15の視点・30の提言について説明を行った。



(3) 「かながわ教育ビジョン」の一部改定についての報告 (神奈川県教育委員会 委員 高橋 勝)

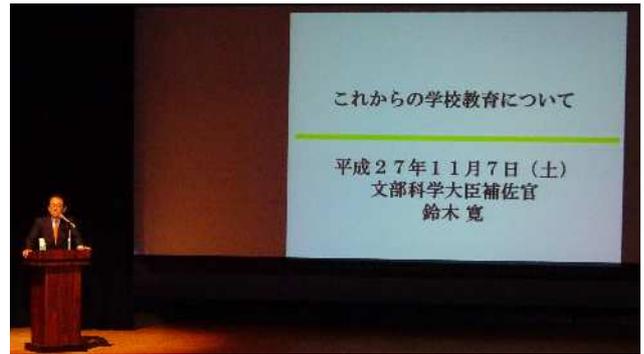
本年10月に一部改定・公表した「かながわ教育ビジョン」に基づき、不易の部分である第2章「基本理念・教育目標」、第3章「人づくりの視点」、また、一部改定の背景とその過程(提言や意見募集等)とともに、改定を行った第4章「展開の方向」及び第5章「重点的な取組み」の内容について説明を行った。

また、本日のコラボが一人ひとりの行動(「行動の知」と参画のスタートの場となり、「かながわの教育の日、教育月間」の設定やコラボ開催、かながわ人づくり推進ネットワークを核として、人づくりにかかわる様々な方々との共感・共有に基づく、協働・連携の拡大・充実など、実効性のある教育政策を推進できるよう取組みを進めていくことについて説明を行った。



(4) 講演 「これからの学校教育について」(鈴木 寛 文部科学大臣補佐官)

改定された「かながわ教育ビジョン」は本当によくできている。それは、高木先生を始め素晴らしい方々がファシリテートしていることと、そのプロセスにある。私は「熟議」の重要性をずっと主張してきたが、教育ビジョンをプランニングから一緒に作っていくというプロセスが非常に重要である。人づくりコラボも、毎年、凄い人たちが集まって凄いエネルギーを掛けてコラボレーションをしている。このことが本当に素晴らしいと思った。私がこの教育ビジョンに付け加えることはほとんどないが、私の観点からこの教育ビジョンがどのように見えているかについて少しお話する。



「生涯にわたる自分づくり」は素晴らしいコンセプトである。今の子どもたちは 21 世紀の社会の中核となる人たちで、その人生の基盤を作る学校教育に「生涯にわたる」という視点を持ち込むことは非常に重要なことだと思う。最近の教育議論がとかく短視眼的であることを危惧しており、そうした中で教育ビジョンの中に「生涯にわたる」という視点を入れていることは大変素晴らしいことだと思う。

また、「自己肯定感を基盤」とした自分づくりを挙げているが、「自己肯定感を基盤」にするということは日本の教育の問題を言い当てている。OECDの直近の「PISA調査」で日本は加盟国中総合1位にカムバックし、このことは評価したい。一方で、アンドレアス・シュライヒャーOECD教育・スキル局長は、日本は調査を始めてから一貫して「学ぶ意欲」が低く、この問題に向き合う必要があるということが一番伝えたいメッセージであると言っている。「学ぶ意欲」の問題、教育ビジョンで大事にしている「自己肯定感」、そして「自己効力感」に取り組んでいく必要があると私はいつも言われている。今度会った時に、神奈川県がOECDのメッセージをしっかりと受け止めていると答えたいし、引き続きこの問題に取り組んでいきたい。

そして、地域・家庭・学校ということで、「つむぐ おりなす かながわの人づくり」を挙げているが、「つむぐ」というのは本当に良い、大事な言葉だと思う。私は金子郁容慶應義塾大学教授とコミュニティ・スクールを提案したが、コミュニティ・スクールで一番大事だと思っているのは斜めの関係を学校に、子どもたちに作っていくということである。横の関係(同級生)、縦の関係(親子、教師と子ども)以外は全て斜めの関係で、斜めの関係が厚くなるのが自己肯定感につながる。斜めの関係である先輩に憧れて、学びの意欲がかきたてられる。こうしたことが教育ビジョンに入っていることはとても大事なことだと思っている。

次に、教育ビジョンの前提の部分を深く理解いただきたい。文部科学省では、学習指導要領の改訂と同時に高大接続という抜本的な改革を目指している。OECDは「Education 2030」という、教育を根本的なところから考え直すということをはじめた。日本では 200~300 年ぶりくらいの大きな社会の変動が起きている。現在の学習指導要領においても、知識・技能はもちろん、その知識・技能をどう使うのか、思考・判断・表現が大事だということを言っている。主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性、要するに個々人がどのように社会と積極的に関わっていくのかということで、日本の最大の問題は「脱・受身人間」だと私はずっと言っている。どうやって主体的に自ら学ぶ人(アクティブ・ラーナー)になっていくか、そういう人をどのように増やしていくかが教育施策の中核になる。これからの 100 年は今までの常識が崩れていくことから、「学び方を学ぶ」ことが重要になる。多種多様な人たちと協働して、自分たちが当事者として社会の問題をどう解決をしていくかという能力(Project Based Learning、Problem Based Learning)を身に付けることである。これからの日本は、ルーティン・ワークでない、問題解決能力を育成することに取り組んでいかなければならない。

最後に、日本の学力が上がった要因として、小学生が本を読むようになったことがある。言語活動、文字活動と向き合っていく中で自分の思考・判断・表現力を深めていくという、教育の不変的な方法に立ち

返ろうという理由から、大学入学試験を変えていくべきであると考えている。

このような背景があるので、教育ビジョンは非常に重要であるということをご理解いただければと思う。

(5) 教育論議

「教育ビジョンの更なる推進に向けて」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、パネリストの課題提起や、高校生を始めとした会場からの課題提起や提案等の意見により、次の4つの視点で教育論議が行われた。

視点1 これからの時代に求められる資質・能力

視点2 コミュニティ・スクール

視点3 グローバル化に対応した教育

視点4 かながわの教育力を生かした取組みの推進

主な意見としては、社会状況の変化や多様性の中での「生涯にわたる自分づくり」、コミュニティ・スクールの推進などに関する課題の提起がなされた。



資質・能力については、自己肯定感が大事であること、子どもの「人づくり」のためには大人や教員の育成に力をいれることが必要であること、学び直しの機会が大事であること等の意見が出された。また、教員の資質に関する疑問、大学入試改革に関する質問や、学校以外の場で大人から学ぶことになることから、大人の姿勢に関する投げかけが出された。

コミュニティ・スクールについては、小・中学校よりも広域から生徒が通っている高校や特別支援学校でも、地域からの協力を得るだけでなく、子どもや教員が地域の人や地域の活性化に役立てることがある等の意見が出された。



かながわらしい取組みとしては、キャリア教育、地域協働の取組み（学校づくり・地域づくり）やかながわらしいネットワークづくり、自発的な学びや、ワールドカップ等の活用によるグローバル化に対応した教育、教員の力量の更なる向上やカリキュラムセンターの充実、県民との協働・連携による取組みなどが挙げられた。

そして、平成17年に策定した時から時代が追いつき、第2章の内容が重要であることや、その実現の手立てとしての第4章・第5章の推進と、一人ひとりが今後どのように取り組んでいくかが重要であるとまとめられた。

(6) 閉会（かながわ人づくり推進ネットワーク 副幹事長 田代 正樹）

閉会の挨拶として、今後の教育ビジョンの更なる推進に向けて、「かながわ人づくり推進ネットワーク」として取り組むとともに、県民総ぐるみでの取組みとなるように、一人でも多くの方の参画を得ていくことについて話があった。